

ひと

「里海」づくりに取り組むNPO法人の事務局長

たなか たけひろ  
田中 丈裕 さん(62)



稲に似た海草アマモ。群生地は「魚のゆりかご」と呼ばれ、里海づくりの核になる。

このアマモをキーワードに、海の環境改善に取り組む各団体が2008年から、全国各地で開いてきたのが、「全国アマモサミット」(<http://amamo-summit2016.com/>)だ。今年は岡山県備前市の日生町で6月3〜5日に

ある。ここは、31年前から漁師たちがアマモ場再生に取り組んできた先駆けの地。サミットで実行委員長を務める。

元は岡山県水産課職員。32年間、漁場に潜ったり干潟を歩いたりし、埋め立てなどで環境が悪化する沿岸に危機感を強めた。九州大学の柳哲雄名誉教授が、人手が加わることで生き物の種類が増えて豊かになった海を「里海」として提唱。一緒に発起人となり、12年に「NPO法人里海づくり研究会」(岡山市)を設立した。

「里海は地球を救う」との思いで国際的な学会などで重要性を訴え続けた。今では、「satoumi」は海の環境を考えるうえで欠かせない言葉になった。

大阪市出身。魚類分類学の落合明氏の随筆「土佐の魚たち」に魅せられ、落合氏が教える高知大学に進学。高知の海で栽培漁業を学んで、潜水士の資格を取った。日生の海にも潜る。「サミットが終わったら、アマモ場にウミタナゴやメバルに会いに行きますよ」

文・写真 阿部治樹